

「ALL・LIVES・MATTER」

阿南第二中学校 三年

岡 おか今日 きょうこマヤ まや

（敬称略）

四年前、アメリカで起きたある事件のニュースが、私のSNSに毎日のように流れてきました。二〇二〇年、アメリカで、黒人男性のジョージ・フロイドさんが、白人警察官から過剰に拘束され、亡くなるという事件がありました。この白人警察官は、十分近い時間、伏せているフロイドさんの首に、膝を乗せた状態で押さえつけていたのです。フロイドさんは「呼吸ができない、助けてください。」と繰り返し懇願していました。しかし、彼の訴えは聞き入れられず、そのまま亡くなってしまったのです。のちの検察側の証人によると、フロイドさんは「袋の中の魚のように、ゆっくり意識を失っていった。」そうです。

このニュース記事を読んだとき、私はフロイドさんの事を想像して、どうしてこんなことが起こってしまったのか、心の底から悲しくなりました。この事件を聞いたアメリカの人たちは衝撃を受け、許せない人種差別だと捉え、社会問題になりました。全米各地で抗議運動が起こり、「BLACK・LIVES・MATTER」（黒人の命を守れ）という大規模な社会運動に発展しました。

実は、このような事件はこれまでも何度も起こっており、毎年約二五〇人以上の黒人が警察官の過度な取り締まりや銃撃によって命を落としています。これは人口比率で考えると、白人の三倍以上もあり、明らかに異常と言えます。

私自身も、アメリカの小学校に通っていた頃、肌の色や髪の色に対することや、自分が持つて行くお弁当の、特にカレーやおにぎりについて、差別的な発言をされ、嫌な思いをしたことがあります。こんな風に、見た目や習慣の違いに対する差別は、アメリカだけでなく、色々な人種の住む、世界のどの国でも見られると思います。

人種差別は、解決するのがとても難しい問題です。人は自分と違うものや知らないものに対して不安感や恐怖感を抱いたり、それらを排除しようとしたりする傾向があります。逆に、自分の属する集団や文化を好ましく思ったり、高く評価したりします。こういう心理的なバイアスが無意識に存在しているように思います。そう考えると、私がショックを受けた友人たちのコメントも、無意識に起こる、異質なものに対するネガティブな感

情から生まれたものだったのかもしれませんが。彼らは明らかな悪意をもっていないかったのだらうと思います。ただ、そうだとしても、私があのときいわれた友人たちからの言葉は、今思い出しても悲しいものです。

人種差別を解消するのが難しいのは、先ほども述べたように差別をしている人々が明らかな悪意を持っている人だけではないからです。皆さんも、自分の行動や発言が差別とは思わず、自分のなかにある偏見や思い込みに気づいていないことはありませんか。また、発言する側が、差別だと思っていないくても、受け取る側が不快に感じたり、傷ついたりすることがあるということを意識していますか。人種差別をなくしていくためには、人の心から偏見を取り除き、すべての人が平等な社会を実現する努力が必要です。それは、私たちが多様性を尊重し、全ての人がもつ価値を認め合うことから始まると思います。

フロイドさんは亡くなる直前に、何を考えていたのでしょうか。もしフロイドさんが黒人ではなく白人だったら、どのような結果になっていたのでしょうか。人の命は、こんなに軽いものなのでしょうか。人の命をこれほど軽く扱ってしまうほど、人種差別とは根深いものなのでしょうか。その後起こったBLM運動は確かに大切だとは思いますが、「BLACK・LIVES・MATTER」（黒人の命を守れ）ではなく、「ALL・LIVES・MATTER」（みんなの命が大切）の方を広めるべきだと、私は考えました。誰もが一人の人間として、他者と対等に向き合い、自分の言葉で、自分に自信をもつて語りあえる世の中になれば、こんなに幸せなことはないでしょう。

私たちが目指すべき未来は、肌の色や髪質、民族や出身地に関係なく、全ての人が平等に機会を得られる社会です。次の時代を生きる私たちの世代が、教育を通じて異文化を正しく理解し、自分のなかで深める必要があります。人種差別のない社会が実現できるかどうかは、今の私たちの何気ない日々のなかで試されています。

そこで、この言葉を合い言葉にしてみてもいいでしょう。

「ALL・LIVES・MATTER」

（みんなの命が大切）